

## 古河電気工業(株) アナリスト・機関投資家向け説明会 質疑応答録 (要旨)

日時：2019年5月28日(火) 17:00-18:00

内容：中期経営計画「Furukawa G Plan 2020」進捗説明会

説明者：代表取締役社長 小林 敬一

代表取締役 兼 執行役員副社長 グループ変革本部長 荻原 弘之

取締役 兼 執行役員 戦略本部長 牧 謙

執行役員 財務・グローバルマネジメント本部長 福永 彰宏

Q：ファウエイ問題についてどう思われるか？

A：EAR規制対象製品については、中国への輸出を見合わせている。影響は不透明要素が大きいですが、グループ全体への直接的なインパクトは大きくない。ただ、顧客自身の様子見感もあり、今後の影響を注視していく。

Q：5G関連で、既に強い企業がいるようなレイヤーの高い製品への対応は？

A：直接その製品市場を奪い取るのではなく、顧客の声を聞き、当社の技術が頼られるという事業スタイルを考えている。

Q：我々がグループ変革本部による成果を理解するには、どんな数値を見ればよいのか？

A：これまでは戦略を立ててもそれをやりきる力が不足していた。10数名の専任部隊と各事業部門にも専任担当を置き、施策ひとつひとつのマイルストーン・効果の定量化を明確にしながら進めている。遅れの原因となる障害があれば、トップの力も使い取り除いていく。拡販による売上増、ものづくり等改革による原価低減などの効果を出していく。今後、皆様にどうお見せしていくか考えていく。

Q：グループ変革本部による成果は、今期の計画にどれくらい織り込まれているのか？

A：定量的には申し上げられないが、かなり織り込んでいる。北米ケーブルの原価低減など、複数のテーマに優先順位をつけながら取り組んでいる。

Q：エネルギーインフラセグメントの2020年度営業利益10億円に向けた施策は？

A：ケーブルから工事・メンテナンスを含めたスマイルカーブの全てを押さえている。年度末に複数のスポット受注が取れた、とお伝えしたが、今もその状況は変わっていない。顧客の信頼度をさらに上げていく。また、瀋陽拠点の構造改革も終わり、成果の刈り取りを行っていく。

Q：グループ変革本部の施策のひとつである「グローバルにおけるファイバ・ケーブル事業の成長の再加速」とは具体

的に？

A： シングルマネジメントの主体を北米の OFS から日本の統括部門長に移した。グローバル調達など原価改善、また、各製造拠点の強みを全体に広げるような取り組みを行っている。米国、欧州での拡販も進めているが、まずは自力でできる原価低減を主に行っている。

Q： 電力事業は長期的な成長を見込む事業、投資回収や人材不足など構造的な課題もある。市場に見方に変化はあるか？

A： 確かに方向性だけが先行している感もあるが、我々はしっかり準備をしており、受注が決まっている案件も複数ある。日本では当社含め 2 社しか供給できるメーカーはなく、見方は変わっていない。

Q： 機能製品について。メモリーディスクや半導体テープは競争環境が厳しいと思うが、防衛策は？

A： いろいろ対策は行っている。メモリーディスクは、顧客の要望する薄型技術に強みを持っている。

Q： ファイバ・ケーブルは出荷数量が戻るといふ計画にも関わらず、増産計画を修正した理由は？北米向けが弱くなっている、コムスコープとの関係に変化が出ているなどはあるか？

A： コムスコープとの関係に変化はない。設備投資については着工を遅らせている。稼働できない状況が見えている中での増産投資は行わない。世界の光ファイバ需要の半分が中国、その需要環境が厳しい中で、シェアを追って安売りをしていくつもりはない。

Q： 御社にとって主要地域である北米の見通しは変わっていないのか？あくまでも中国の問題なのか？

A： 中国市場の状況により、アジアなど他の地域に影響が出ることでファイバの見通しが変わることはあり得るが、北米市場については、時期がずれることはあっても戦略は変えていない。

Q： P6 で各事業・製品の事業資産営業利益率の改善を説明いただいたが、全社の事業資産営業利益率は低下しておりリンクしていない。今後 2020 年に向けてこれがさらにどう変化し、その結果全体にどう関わっていくのか解説いただきたい。

A： 10%という閾値を見て、その事業から撤退する、あるいは、別の形での継続を考えるなど検討しているが、将来のトップラインを上げるための投資をしているため、一度、事業資産営業利益率が下がるのは理解している。刈り取りが始まれば事業資産営業利益率が上がっていくことをお示しできるようになる。

Q： P32 の今年度の設備投資は生産性改善、合理化のウェイトが上がるとのこと。これは、より投資回収確度の高い部分のウェイトが上がるということだと思うが、18-20 年度の 3 年間の設備投資計画 1,400 億円に対し、最終年

度のこの部分のウェイトはどうなっていくのか？ 投資、回収の確度、時間軸が変わっていくと期待してよいか？

A：過去に比べ市場を見る目は上がってきたと思う。まだ業績予想を変更することはあるが、いつまで投資を遅らせるべきかなどを考えられるようになってきた。そのため、今は原価低減や、物流改善などの活動にお金を使い、将来の収益力の向上につなげていく時期であるという判断をしている。この中期（2020年度まで）の間にバランスシートが良くなったといわれるようにしていく。

以上